加賀地方の俳壇形成と高橋因元の俳歴について

李 炫 瑛*

目　次

1. はじめに
2. 諸撰集への入集狀況
3. 編者別の入集狀況
4. 主要俳人の活躍時期
5. 高橋因元の入集狀況と俳諧活躍
6. その他の俳人
7. まとめに

1. はじめに

近世の加賀地方は加賀藩と支藩の大聖寺藩で構成され、交通上の要衝という立地條件と経濟的な發展を基盤に文芸活動が活發であった。芭蕉は『おくのほそ道』の山中條に、

> 溫泉に浴す。其功、有間に次と云。
>
> 山中や菊はたをらぬ湯の匂
>
> あるじとするものは、久米之助とて、いまだ小童也。かれが父、俳諧を好て、洛の貞室、若輩のむかし爰に來りし比、風雅に辱られて、洛に歸りて、貞德の門人となつて、世にしらる。功名の後、此一村、判詞の料を請ずと云。今更、むかし物がたりとは成ぬ[1)]。

という逸話を書き留めているが、この話が眞實であるとすれば、加賀地方では、京都の俳諧指導者である貞室の名が世に知られる以前から俳諧が嗜まれていたのである。

加賀地方の俳諧についての研究は、『加能俳諧史』（大河寥々著、昭和一三、金澤文化協會）とその改訂版『改訂加能俳諧史』（大河良一著、昭和四九、清文堂）、それから『

＊ 建國大學校 助教授 日本古典文學

1)「おくのほそ道」(『校本芭蕉全集』第六卷、富士見書房、1989年、p.132)による。

俳句講座』所收「北陸俳諧史」に一部言及されている。しかし、これらの從來の研究に、近世初期の加賀地方の俳諧について詳しく考察したものはない。本稿では、近世初期における加賀地方の俳諧の様相と展開過程、中央宗匠たちとの交流關係を、加賀俳人高橋因元と諸俳人の俳諧活動を通して檢討していくことにする。すなわち、俳人らの活動の跡を詳細に檢討し、貞門期から談林期へと移行する過渡期の加賀俳壇の様子と変化の過程を考察し、加賀俳壇の形成過程を明らかにしたい。

2. 諸撰集への入集狀況

まず、最初の俳諧撰集『犬子集』が編纂される寛永一〇(1624)年から天和四(1684)年までの諸撰集に作品の採錄された加賀俳人の人數を時代順に示しておく。

＜資料一＞加賀俳人の入集する撰集一覽

寛永一九年七月刊『鷹筑波集』西武編、一人
正保二年二月刊『毛吹草』重賴編、一人
　四年二月刊『毛吹草追加』重賴編、一人
慶安元年八月刊『山之井』季吟編、二人
明暦二年八月刊『玉海集』貞室編、五人
　二年一〇月刊『口眞似草』梅盛編、四人
　三年一〇月刊『砂金袋』西武編、三人
　四年三月刊『鸚鵡集』梅盛編、九人
万治二年一〇月序『捨子集』梅盛編、一〇人
　三年正月刊『新續犬筑波集』季吟編、二人
　三年九月刊『百人一句』重以編、一人
　三年一〇月刊『懷子』重賴編、四人。【追加の部】二人
寛文二年正月刊『伊勢正直集』如之編、一九人
　三年二月刊『五條之百句』貞室編、一人
　三年五月刊『破枕集』良保編、一人
　三年一〇月刊『木玉集』倫員編、五人
　三年一〇月刊『早梅集』梅盛編、一人
　三年頃刊『貞德誹諧記』一貞編、一人
　四年九月刊『佐夜中山集』重賴編、［大正寺之住］五人［金澤之住］四三人。【付句之句數】［金澤之住］三人

四年一二月刊『落穂集』梅盛編、二〇人
五年成『維舟筆歳旦發句集』維舟自筆、二人
五年三月刊『蘆花集』似船編、八人
五年八月刊『小町踊』立圃編、三〇人
六年三月刊『遠近集』長愛子編、二人
七年九月刊『玉海集追加』貞室編、一三人
七年一月刊『續山井』湖春編、二六人
八年五月刊『伊勢躍』加友編、二二人
八年六月刊『細少石』梅盛編、三〇人
九年九月刊『一本草』未琢編、二七人
一〇年正月以前成『季吟誹諧集』、一人
一〇年六月刊『大和順礼』正辰編、六人
一〇年刊『寛伍集』方由編、二人
一一年正月刊『蛙井集』清勝編、一一人
一一年二月刊『宝藏』元隣編、一人
一一年刊『塵塚』成之編、一人
一一年三月刊『時勢粧』維舟編、［金澤之住］二二人［宮腰之住］二人
一二年六月刊『續大和順礼』正辰編、二人
一二年七月刊『大海集』宗臣編、二人
一二年一二月刊『山下水』梅盛編、四七人
一三年二月刊『鶯笛』隨流編、一人
一三年八月刊『松花集』良庵編、一人
一三年一〇月刊『誹諧捨舟』常矩編、一人
延宝元年一二月自跋『旅衣』友意編、二人
二年刊『歳旦發句集』表紙屋庄兵衛編、二人
二年五月刊『如意宝珠』安靜編、二〇人
二年五月刊『後撰犬筑波集』蘭秀編、一人
二年五月刊『大井川集』維舟編、一四人
二年五月成『櫻川』風虎編、［大聖寺住］一人［金澤住］一〇人
二年一一月刊『伊勢踊音頭集』素閑編、一四人
二年一一月刊『小川千句集』貞竹編、四人
三年九月刊『千宜理木』宗信編、二人
三年一一月刊『糸屑』重安編、一五人
三年一一月自序『宮城野』釣竿子編、二人

四年正月『季吟・梅盛歳旦』「延宝四年梅盛」（知足宛近藤次兵衛書狀による）、四人
四年三月刊『季吟廿會集』季吟編、一人
四年三月刊『武藏野』維舟編、一七人
四年一〇月刊『古今誹諧師手鑑』西鶴編、一人
四年一一月刊『續連珠』季吟編、三八人
四年以前刊『下主知惠』正舍編、四人
五年二月刊『敞帚』常矩編、一人
五年九月刊『かくれみの』似船編、九人
五年一一月刊『唐人踊』立圃編、四人
五年冬、六年刊『越路草』卜琴編、二三人
六年正月刊『俳諧三ツ物揃』「似船引付四枚目」井筒屋編、三人
六年刊『道づれ草』梅盛編、四二人
六年刊『菊酒付句』慶彦編（一煙編か）、二二人
七年四月刊『富士石』調和編、六人
七年九月刊『誹諧玉手箱』蝶々子編、三人
七年、八年刊『雪之下草歌仙』野水編、八人
八年正月刊『延宝八年歳旦集』「芦月庵引付七枚目」井筒屋編、一人八年五月刊『白根草』友琴編、［山中］五人［小松］三人［松任］九人［鶴來］三人[宮腰］九人［金澤］一三八人［不知作者］四人
八年五月刊『八束穂集』桂葉編、一一人
八年九月序『点滴集』未詳、一人
八年刊『名取川』重頼編、一二人か
八年刊『誹枕』幽山編、一人
延宝末年『金剛砂』調和編、一人
九年三月刊『安樂音』似船編、七人
九年五月刊『俳諧雜巾』常矩編、一三人
天和元年一二月刊『加賀染』一平編、［大聖寺］一人［山中］四人［小松］四人［安宅］一人[村井］二人［鶴來］一人［松任］一一人［金澤］一〇三人［二俣］一人[高松］一人［外日角］一人［白尾］一人［宮腰］三三人［不知作者］六人
二年五月刊『松嶋眺望集』三千風編、二人
三年成か『誹諧金澤五吟』友琴他作、五人
※以上は、今榮藏氏編『貞門談林俳人大觀』〈中央大學出版部・一九八九年〉を參考にし、

原本に当たって確認するとともに、自ら新たに補ったものである。

寛永一〇年には初の俳諧撰集『犬子集』が刊行されるが、加賀の作者はその九年後に刊行された『鷹筑波集』にその名が見いだされる。その後、天和三年まで七〇以上の撰集への入集が確認される。京都の撰集が最も多いが、伊勢・江戸・大坂・肥後の撰集にも句を収めている。そして延宝六(1678)年からは『菊酒付句』『雪之下草歌仙』『白根草』『加賀染』『誹諧金澤五吟』などの、加賀の俳人による俳諧撰集も編纂され、加賀地方での俳諧人口がいっそう増えていくことがうかがえる。

地方／作品	加賀	越前	越中	越後	佐渡	能州
口眞似集	4	0	0	2	0	0
鸚鵡集	9	1	0	16	1	0
捨子集	10	0	0	0	0	0
早梅集	2	0	0	0	0	0
落穂集	20	1	0	0	3	0
細少石	30	0	0	1	1	0
山下水零本	47	4	0	5	0	0
道づれ草	42	2	2	13	0	2
合計	164	8	2	37	5	2

3. 編者別の入集状況

これらの入集状況を編者別に分け、越前・越中・越後などを含めた、当時の北陸地方の

	加賀	越前	越中	越後	能州
合計	66	127	9	38	9

俳諧普及状況を考えてみたい。

＜資料二＞編者別の入集状況－加賀とその周辺－

①梅盛

②重頼

③季吟・湖春

	加賀	越前	越中	越後	能州
合計	68	127	9	38	9

初めに貞門俳諧の古參で保守的な宗匠である梅盛[2)]との關係を見てみよう。梅盛は北陸地方の中では加賀地方と最も關係が深く、その他の地方との關係は比較的淺いものであった。そして、貞門時代の指導者の中ではやや先進的な句を詠んでいた重頼[3)]も、加賀地方にかなり深いつながりを持っていたと言えよう。しかし、季吟[4)]・湖春[5)]の親子とはそれほどでもなく、彼らは加賀地方よりは越前俳壇と深い關係を持っていたことがうかがえる。ちなみにこの集計からは京都の宗匠らの地方俳壇への経營意欲も推し量ることが出來る。当時、俳諧指導者であった宗匠らには俳風における各々の特徴があったと思われるが、だからといって加賀の作者たちがそれぞれの宗匠の俳風を見習って實作してしたかという問題は、いまだ檢討の余地があると考えられる。

4. 主要俳人の活躍時期

ここでは、**＜資料一＞**の、加賀俳人の入集する撰集一覧から、最も活躍していた俳人たちとその活躍時期について檢討してみる。

---

2) 高瀬梅盛は、元和五(1619)年から元祿一五(1702)まで活躍した貞門俳諧師。撰集としては、『口眞似草』『鸚鵡集』『細少石』『山下水』『道づれ草』などがある。元祿期まで京都俳壇の古參俳人として活動。(『俳文學大辭典』、角川書店、1995年、p.725)

3) 松江重頼は、慶長七(1602)年から延宝八(1680)年まで活躍した俳諧師。俳書『毛吹草』をはじめ、撰集『佐夜中山集』『時勢粧』『名取川』などがある。(『俳文學大辭典』、角川書店、1995年、p.357)

4) 北村季吟は、寛永元(1624)年から宝永二(1705)年まで生存。俳諧師、和歌作者、歌學者。貞德門。撰集には、『續連珠』『誹諧用意風體』『增山井』などがある。(『俳文學大辭典』、角川書店、1995年、p.196)

5) 北村湖春は、慶安元(1648)年から元祿一〇(1697)年まで生存。季吟の長男として季吟俳壇の實務担当者。京都俳壇と江戸俳壇との交流を積極的に図る。撰集には、『續山井』がある。(『俳文學大辭典』、角川書店、1995年、p.293)

＜資料三＞主要俳人の活躍時期

	寛永一九(１６４２)	承応元(１６５２)	寛文二(１６６２)	寛文一二(１６７２)	天和二(１６８２)
可理	寛永一九			寛文七	
正種		明暦二		延宝五	
因元		明暦二			
一笑			寛文二		
一煙（句空）				寛文八	
一平				延宝四	
松葉（牧童）					延宝六
可融（北枝）					延宝七

まず、可理は加賀の俳人として最も早く活躍し始めた人物で、寛永一九年の『鷹筑波集』から寛文七年の『續山井』まで一一の撰集に入集している。句數から見ると微々たるものであるが、彼によって加賀俳諧の中央進出の第一幕は開かれたのである。そういう意味で、可理は加賀地方の俳諧の開拓者とも言えよう。

次の正種は明暦二年の『玉海集』から延宝五年の『唐人躍』まで一四の撰集に入集した俳人で、初期には特に梅盛編の『口眞似草』『鸚鵡集』、西武編の『砂金袋』などで大いに活躍した俳人である。この正種と同じ時期に俳諧を始めた因元は貞門時代から談林時代の延宝・天和年間まで活躍した俳人で、初期の加賀俳壇の中心的存在である。彼については、次の節でもう少し詳しく檢討してみる。

一笑については、芭蕉との間に有名な逸話がある[6]ように、生存時、二人の出會いは果たせなかったが、彼は早くから貞門俳諧から談林俳諧へ、さらに金澤にいながら蕉風俳諧までを試みるなど、夭折するまで俳諧一途の一生を送った人物である[7]。

一煙は寛文七年の『伊勢踊』に三句入集するのをはじめ、以降、加賀地方の俳諧撰集『菊酒付句』『雪之下草歌仙』『白根草』『加賀染』『誹諧金澤五吟』などで大いに活躍する俳人である。一煙については拙論を參照されたい[8]。

一平は天和元年の加賀の談林俳諧撰集『加賀染』を編纂した俳人で、延宝四年からその名が見える。さらに、加賀蕉門の牧童・北枝として知られる松葉・可融はそれぞれ延宝期から諸撰集に入集しはじめ、元祿二年、芭蕉の「奥の細道」行脚時には、二人とも芭蕉に

6)「おくのほそ道」(注1の前掲書)には、「一笑と云ものは、此道にすける名の、ほのへ聞えて、世に知人も侍しに、去年の冬早世したりとて」とあるように、芭蕉との出會いを待っていた一笑の願いはかなわなかった。

7) 拙論「小杉一笑の俳歴」(『日本文學』9月号、日本文學協會、2001、9)

8) 拙論「柳陰軒句空と加賀俳壇について-宇野一煙との關係をめぐって-」(『連歌俳諧研究』第100号、2001、2)

入門し、以後加賀地方の蕉風俳人として大いに活躍する 。

5. 高橋因元の入集狀況と 俳諧活躍

次は、近世初期の貞門・ 談林期を貫いて最も活躍していた高橋因元を中心に加賀地方の俳諧の展開過程を考えてみたい。まず、高橋因元の諸撰集への入集狀況を年代順に並べておく。

＜資料四＞高橋因元の諸撰集への入集狀況

明暦二年八月刊『玉海集』貞室編、一句
万治二年一〇月序『捨子集』梅盛編、一一句
寛文二年正月刊『伊勢正直集』如之編、八句
　三年一〇月刊『木玉集』倫員編、四句
　三年一〇月刊『早梅集』梅盛編、一句
　四年九月刊『佐夜中山集』重頼編、發句二六・付句一
　四年一二月刊『落穂集』梅盛編、三八句
　五年八月刊『小町踊』立圃編、四句
　七年九月刊『玉海集追加』貞室編、發句一〇・付句二
　七年一月刊『續山井』湖春編、一七句
　八年五月刊『伊勢躍』加友編、四八句
　八年六月刊『細少石』梅盛編、六八句
　九年九月刊『一本草』未琢編、三一句
　一一年正月刊『蛙井集』清勝編、四句
　一一年三月刊『時勢粧』維舟編、九句か
　一二年七月刊『大海集』宗臣編、一句
　一二年一二月刊『山下水』(零本)梅盛編、七六句か
延宝二年五月刊『如意宝珠』安靜編、發句四六句・付句二
　二年五月成『櫻川』風虎編、三一句
　二年一一月刊『伊勢踊音頭集』素閑編、二六句
　三年一一月刊『糸屑』重安編、四句
　四年一一月刊『續連珠』季吟編、七句
　四年以前刊『下主知恵』正舍編、三句
　六年刊『道づれ草』梅盛編、二七句

七年四月刊『富士石』調和編、一句
八年五月刊『白根草』(零本)友琴編、四三句か
八年五月刊『八束穂集』桂葉編、八句
八年九月序『点滴集』未詳、一句
天和元年一二月刊『加賀染』一平編、一〇句
※『沙金袋後集』未詳、(一句以上) (原本未見『詞林金玉集』による)
貞享二年跋『新玉海集』貞室編(貞恕補)、一句
元祿四年刊『柞原集』句空編、一句(亡人として入集)

因元は明暦二(1656)年から貞享二(1685)年『新玉海集』まで三〇年間三〇余撰集に入集している。特に梅盛の撰集には万治二年『捨子集』から延宝六年『道づれ草』まで加賀俳人の中では最も多く入集していることが注目される。例えば、『細少石』には、諸國の梅盛系の作者を網羅しているが、因元は加賀の入集俳人のうちで飛び抜けて多數の作品が収録されている。また『山下水』は、二冊のみの零本であるが、その中に加賀俳人四七人が入集し、特に因元は七六句を收め、それぞれ一〇句にも滿たない他の作者を大きく引き離しているばかりではなく、撰者の梅盛六三句を上回っている。このことから、因元は梅盛と連携して、加賀俳人の句を集めるなどの立場だったのではないかと考えられる。

また、寛文二年の『伊勢正直集』、寛文八年の『伊勢躍』、延宝二年の『伊勢躍音頭集』など、伊勢關係の撰集における活躍にも特徴がある。特に『伊勢正直集』、『伊勢躍音頭集』への入集句數は他の加賀俳人よりもはるかに多いのである。
そして、天和元年に『加賀染』に入集し、貞享二年には『新玉海集』に最後の入集が確認できる。

このように因元は万治二年刊『玉海集』への最初の入集から寛文・延宝、そして天和元年『加賀染』まで旺盛な創作活動を見せながら加賀俳壇を導いてきたと考えられる。彼は主に京都の撰集を中心に活動したが、他にも伊勢・江戸・大坂の撰集にも參加している。彼の諸撰集への入集狀況から梅盛との親密な交流が考えられるが、当時地方では、ある一つの流派、または師匠について活動をするのではなく、募集があればその都度多くの撰集に句を寄せていたため、梅盛と師弟關係にあったかどうかは愼重な判斷が要される。

では、ここで因元の作品を見てみよう。

はやさきははしめの老か姥さくら　　賀州金澤之住因元(『玉海集』)
　　直仍といふ人のもとにて
さく比やなをよりのかぬはなの友　　加州因元(『一本草』)
　　美濃にて
歌　秋かけていひし長柄の釣柝哉　高橋因元(『時勢粧』)

はつせにて

うこんとかや見しは初瀬の女郎花　加州金澤因元（『如意宝珠』）

これら初期の作品は、貞門俳諧の典型とも言える言葉の遊びによる滑稽な作品が多く、「秋かけて」のように、和歌の「本歌取り」表現方法を利用した機知的な作品が目立つ。

ところで、因元の諸撰集への入集状況から推し量れるように彼の活躍ぶりに比べ、以外にも加賀の外へ旅したことがうかがえる句文は見あたらず、『時勢粧』と『如意宝珠』の「美濃にて」「はつせにて」の前書が、彼の足跡を伝える數少ない例である。これらの前書から、当時因元は京都を中心とした近畿地方へ足を運んでいたと考えられる。

寛文十年に

寛文や十ねんうくる御忌參　　高橋因元（『櫻川』）

賀州より能州へ鷹狩にゆく人に申つかはしける

能登ならはうつらなくらん小鷹狩　　高橋因元（『櫻川』）

桑門の身まかりける追善

かたみもやあるはなみたの古紙子　　高橋因元（『櫻川』）

わらふ山の口に手あつるわらひかな　高橋氏号是靜因元（『伊勢踊音頭集』）

霧の海底なる虫や夜鳴貝　　因元（『富士石』）

あら笑止や風か替わつた扇引　　因元（『加賀染』）

また因元は、毎年欠かさず風虎編の『櫻川』に多數の作品を送っていることから、少なくとも加賀地方の俳人らの作品の募集を担当していたのではないかと考えられる。その作風は、いまだ和歌の本歌取や掛詞などの表現を利用したものではあるが、寛文・延宝期に加賀でもっとも積極的に活躍した俳人であるには間違いないだろう。この時期、『伊勢踊音頭集』によって彼の号が「是靜」であったことも確認できる。しかし、延宝後半になると、時代の流れにも影響を受け、談林俳諧へと轉向していく。その態度はあまり積極的なものではないが、談林撰集である『富士石』『点滴集』に句を寄せているし、天和元年の『加賀染』になると、談林の破調の句をも試みている。

さて、加賀地方の蕉風俳人である句空が編纂した『柞原集』には次のような記錄が殘っていて注目される。

あはれさも夜るこそまされ花とうろ　亡人因元

なき跡のしるし立むと思ひけるころ、かねて辭世とはなけれ

と、花とならひの岡のへにとよめりしを、ふと思ひ出侍るまゝ

石のきれもとしに一度は花とうろ　句空（『柞原集』）

この記錄によれば、すでに元祿四年、因元は「亡人」として作品を入集し、句空も因元の墓を訪ねて辭世句を捧げているから、この時すでに亡くなっていたと考えられる。

6. その他の俳人

草創期の加賀地方では、可理と正伯の作品しか見られず、全体的に微々たるものであったが、彼らによって加賀俳諧の中央進出の第一歩が踏み出されたには違いない。
その後、はやく『玉海集』には、

上京の比東山肉か谷といふ所にて

草木もきはを見せけりしゝか谷　　賀州金澤篠田氏明忠

明忠の句が見え、前書から上京していたことがうかがえる。また、『口眞似草』の正種[9]、『蘆花集』の重次の入集句[10]及び前書からも、實際京都まで足を運んでいたことが分かる。彼らはおそらく、公私の用件を帶びて京都へ往來していたのであろう。そうした折に貞德や貞室、あるいは他の貞門俳人達に近づき、その指導を仰ぐこともあったと考えられる。

伊勢の撰集『伊勢踊』にみると、加賀の信興は堺まで出かけたらしく[11]、一方京都の俳人である友靜は「賀州の人興行に」と前書して「加賀に梅田雪中に咲銀花哉」とあるように、加賀人の興行に句を寄せている。ここからも加賀と京都との交流の一端がうかがえる。

さらに、貞門期の江戸俳壇を代表する未琢編『一本草』にも加賀關係の記事が多數見られる。編者未琢やその父未得の句の前書には加賀との關係を示す文言が少なくない。その前書には「加州田井の天神奉納」「加州井上氏成保が老父身まかりける時國を隔たれは對面せさる事を愁歎ありけるにいひつかはし侍る」「青山氏宗次加州へまかられける餞別に」など、かなり親密な交流をしていたと考えられる。前書に登場する井上成保やその父、青山宗次、同藤夏がどのような人物であるかは不明であるが、編者未琢やその父未得らが江戸・加賀を往來する過程で交流が生じたのであろう。

先述したように、当時は、ある一つの流派、または師匠について、そのもとで俳諧活動をするのではなく、その都度、募集があれば多くの撰集に入集していたと思われる。それは当時加賀の貞門俳人として最も活躍していた正種と因元の入集狀況から窺えることで、それは中央俳壇ではなく、地方だからこそ出來ることだったかも知れない。先に檢討した因元の場合も梅盛の撰集『捨子集』『早梅集』『落穂集』『細少石』『山下水』『道づれ草』に最も多く入集しているが、だからといって他の撰集に一切句を寄せなかったのではなく、貞室の撰集『玉海集』『玉海集追加』、重賴の撰集『佐夜中山集』『時勢粧』、湖

9) 正種の句には、「嵯峨二尊院にて　本尊と又なく鳥や二尊院」(『口眞似草』)などがある。
10) 重次の句には、「上京の時江州ぜゝにて 花にふく風ぜひもなし月に雲」「清水寺一見の時 布　施物が経かくたうのはなころも」(『蘆花集』)などがある。
11) 信興の句には、「堺の塩干見物に遲く罷侍て 蛤はまたふみも見ぬ塩干哉」(『伊勢踊』)などがある。

春の撰集『續山の井』にも多數の入集を果たしていたのである。

さらに元祿一三年の句空編『誹諧草庵集』所收、句空の作品の後書には、「むかし短冊乞けるに書こされし也」「むかしの文通のうちに侍り」「せうそこのはしに侍り。いつの年なりけむ」とあり、その後書から、大坂の梅翁すなわち宗因や、京都の維舟すなわち重賴や、同じく京都の如泉とも、書簡による親密な交流が行われていたことが分かる。

さて、京都では寛文一二・三年から延宝三年頃まで、いまだ貞門の強い支配下にあった。それは、所謂貞門七俳仙のうち、立圃・貞室はすでになくなり、令德の活動は衰えていたものの、梅盛は『山下水』を、西武は『砂金袋後集』を、維舟は『時勢粧』『大井川集』『武藏野』を、季吟は『季吟廿會集』『續連珠』を刊行して活發な活動を示し、依然として俳壇の中心的な位置を示していたことからもわかる。その後、新風談林俳諧へ移る似船・常矩・自悅らもこのときはまだ貞門の人であった。似船は延宝二年、師安靜の遺稿『如意宝珠』を刊行し、常矩は延宝元年に『誹諧捨舟』を刊行したが、それはいかにも貞門的な句風に滿ちたものであった。

しかし、このような京都俳壇も宗因を中心とする談林派の波に呑まれることを免れることは出來なかった。京都俳壇の中でいちはやく新風を志した高政をはじめ、常矩・似船・自悅らが續々と新風を盛り込んだ俳書を刊行したのである。まず、延宝五年、高政は『後集繪合』を、常矩は『やぶれははき』『蛇之助五百韻』を、似船は『かくれみの』を、自悅は『釋敎誹諧』を出して新しい方向を示したのである。

こういった狀況の中、早速加賀俳人も似船・常矩の談林俳諧撰集へ參加していく。『かくれみの』には山中の俳人が最も多く入集され、八人のうち金澤の貞之を除けば、すべて山中の人である。以前、寛文五年に刊行された似船の『蘆花集』にも八人のうち、三人が山中や大正持の人であったことを考え合わせると、似船と山中とは以前から交流があったことと考えられる。『かくれみの』には、

香具屋重次興行

ここにあり彭祖以來の菊の露　似船

といった前書の發句が見える。この重次は『蘆花集』に最も多く入集している「大正持住水江氏重次」のことで、『蘆花集』には、次のような句を寄せている。

上京の時江州ぜゝにて

花にふく風ぜひもなし月に雲

清水寺一見の時

布施物が経かくたうのはなころも

上京の時東寺にて

羅しやう門春やむかしのおにかはら

これらの作品とその前書から、当時重次は公私の用件、あるいは香具屋の商用で京都を

往來し、その過程で京都の宗匠らと交流し、似船とも面會していたのではないかと考えられる。そして加賀の作者として俳諧興行をも行ない、それに似船が參加していたか、句を寄せていたと考えられる。似船の『かくれみの』に山中の作者が多いのも、あるいは、寛文以來の重次を通じての關係だったかも知れない。

その後、似船は延宝六年と同八年の「歳旦引付」に加賀の俳人一笑らの句を入集し、延宝九年には『安樂音』に金澤・山中の俳人の句を收めている。特に「歳旦引付」に參加していた一笑は、他の誰よりも多い一七句を入集している。『安樂音』に見られる漢詩文調については、すでに雲英末雄氏が「きわめて低い次元でのもので、漢詩文のもつ特有な語調・表記文体を用い、さらに漢詩文の詩句の換骨奪胎によって滑稽感を強く押し出そうとするものであった」12)と指摘されているように、あまり評価されてはいない。この作風が加賀の作品にはどのように受容されたかみてみよう。

東方や御ざんせいゐ様天下の春　　加州一笑
西山に花乃里人獲タリ櫻狩　　加州一笑
中ー黑や義興顯レタリ夕たち雲　　加州金澤高田貞之
口きりや師亭主乃湯煖霰金　　加州金澤德利
作ル雪やこゝも越路の弥陀如來　　加州松任薫烟

似船ほどではなくとも、加賀の作者らも漢詩文の語調と表記、字余りなどの破調を眞似て句作していることから、地方ではあるが、当時の流行の新風俳諧を把握していたことと考えられる。

ところで、加賀では似船だけではなく、早速、常矩の談林俳諧撰集『やぶれはゝき』『俳諧雜巾』にも句を收めている。初期の『やぶれはゝき』には一人しか入集していませんが、延宝九年『俳諧雜巾』になると、小松・宮腰・金澤・松任の俳人の作品が入集され、加賀地方全体にわたって談林俳諧が廣がっていることがうかがえる。しかし、加賀での似船の談林俳諧の本據地とも思われる山中では一人も入集していないことから、すでにそれぞれの勢力圏が形成されていたのではないかと考えられる。ここで、『俳諧雜巾』に入集している發句を一つとり擧げてみよう。

珍重也鏡台の月〇二へ　一笑

という句です。「〇二」の後にある記号は俳諧において秀逸な句に与えられた宗匠の評点を視覺的に表現したものである。そこには、作者の意表をつく遊び心が現れているのではないだろうか。これは似船の『安樂音』のなかで、すでに似船一派の俳人が試みていた表現手法だったのである。

こういった談林俳諧の流行が、ついには加賀だけの談林俳書をも編集させることになるの

12) 雲英末雄氏の「蛇之介常矩について」(『元祿京都俳壇研究』、勉誠社、昭和60、p.245)による。

である。それが天和元年に刊行される『加賀染』である。撰者は他ならぬ常矩の『俳諧雜巾』に多くの句を入集していた宮腰の久津見一平だった。加賀の金澤を中心に加越能三國の作品を集めたこの撰集には、『俳諧雜巾』に入集していた加賀俳人一八人のうち、一一人の名が見え、引き續いて活躍していたことがうかがえる。そして、『安樂音』『俳諧雜巾』などの京都談林俳諧の影響と見られる破調の句をはじめ、漢詩文的表記が以前の撰集に比べて多くなっている。『加賀染』の句を見てみると、

飾レリ蓬萊既伊勢海老の山近ク　一笑
雜煮のなかれ芹川見えつ千代の春　一烟
海老か問フ金衣答テ千里の春　一平
札有けり名たいの龜屋殿初芝居　貞之
寄て見れは乞食の文字すはれりせかきの旗　長之
なかれの袖小萩こえたり色なる波　閏之

とあり、既成の吟調をうち破ろうとするのは、当時の一般的な傾向であって、当時加賀俳人たちもそれに追隨していたと考えられる。

7. まとめに

以上、貞門・談林期の加賀俳壇について考察してきた。加賀地方には早くから京都貞門俳諧を學び、特に梅盛と重頼の撰集を中心に活躍してきた多くの作者がいた。中でも因元は加賀貞門の中心的俳人として明暦から寛文・延宝年間まで貞門俳諧を固守しつつ、天和期に入ってからは時代の流れに從い、談林の破調句も試みた痕跡さえうかがえる。

このように因元は、おおむね貞門俳諧を固守していたと思われるが、その一方で、早くも延宝五年頃には、京都の談林俳諧の影響が加賀にも見られる。延宝末年には似船・常矩らの破調と漢詩文調の作風が、加賀地方の作者の間でも流行し、さらには加賀獨自の談林撰集が天和元年に編纂されるのである。

從來、蕉門以前の加賀俳壇の實態は、全く顧みられなかったと言っても過言ではない。しかし、これまで見てきたように、加賀地方には蕉門以前の俳諧に遊んだ多様な俳人たちがいたのである。こういった豊かな土壌があったからこそ、芭蕉の文學活動に呼応して、加賀蕉門は即座に大輪の花を咲かせることができたと考えられる。

【參考文獻】

・大河良一(1974) 『改訂加能俳諧史』、清文堂、p.3-13
・尾形つとむ(1995) 『俳文學大辭典』、角川書店
・雲英末雄(1985) 『元祿京都俳壇研究』、勉誠社、p.39-54, p.239-264
・今榮藏(1989) 『貞門談林俳人大觀』、中央大學出版部、p.1-742
・野間光辰(1986) 「寛文比俳諧宗匠並素人名譽人」『談林叢譚』、岩波書店、p.319-360
・俳句講座刊行會(1959) 『俳句講座』第10卷、明治書院、p.95-108
・前田金五郎(1965) 「雪之下草歌仙俳諧-解題と翻刻-」『國文學』 關西大學三九号、p.23-40
・森川昭(1963) 「江戸貞門俳諧の研究」『成蹊論叢』第一号、p.1-78

〈俳諧撰集〉

・「伊勢踊」(1979) 『松坂市史』七、蒼人社
・「玉海集」(1927) 『日本俳書大系』第六卷、日本俳書大系刊行會
・「櫻川」(1960) 『櫻川』、大東急記念文庫
・「柞原集」(1937) 『加越能古俳書大觀・上編』、石川縣図書館協會
・「山之井」(1927) 『日本俳書大系』第六卷、日本俳書大系刊行會
・「蘆花集」 早稻田大學中央図書館中村俊定文庫本

要　　旨

本論文は、近世初期の加賀地方の俳諧の成長過程，そして俳人の活動を、俳壇と俳人との關わり、中央俳壇や地方俳壇との關わりに注目しながら、通史的、かつ共時的に究明しようとしたものである。そのために、現在まで發見・公開された諸俳書から加賀俳人の作品を漏れなく拾い上げ、その入集狀況と作品に基いて實証的に檢討した。

加賀では、最初の俳諧撰集『犬子集』（寛永一〇年）への入集は見ないが、その九年後に刊行される『鷹筑波集』（寛永一九年）に最初の入集が確認される。因元は万治二年刊『玉海集』への最初の入集から寛文・延宝、そして貞享二年跋『新玉海集』まで三〇年間三〇余撰集に入集し、旺盛な創作活動を見せながら加賀俳壇を導いてきた。彼は主に京都の撰集を中心に活動をするが、他にも伊勢・江戸・大坂の撰集にも參加している。彼の諸撰集への入集狀況から梅盛との密接な交流が考えられる。

因元の他に、活躍した俳人としては早創期の可理と正伯が擧げられ、寛文期に入ってからは重次・一笑・一煙などがあげられる。また、彼らの中には直接京都や江戸の指導者らと交流する人物も出てきて俳諧人口も一層增えてくる。延宝末期になると、大坂の談林俳諧の影響が加賀地方にも現れ、加賀俳人自ら破調句を詠んだり、談林風の撰集を編集するなど、積極的に談林俳諧を受け入れる樣子がうかがえる。このような豊かな俳諧の土壤があったからこそ、後に芭蕉が訪れた時、蕉風俳諧に呼応し、加賀蕉門の旗をかかげて多くの俳人が活躍できるのであろう。

キーワード：高橋因元、加賀俳壇、京都俳壇、梅盛、一煙、一笑

투　　고：2003. 8. 28
2차 심사：2003. 9. 13
3차 심사：2003. 10. 10

住　所：143-701 서울 廣津區 華陽洞 1番地 建國大學校 日語教育科
電　話：02-2049-6016
E-mail：hyylee@konkuk.ac.kr